資　料

19世紀イギリスにおけるラグド・スクールと肢体不自由教育

真城 知己
（千葉大学教育学部）

イギリスにおける肢体不自由教育史に関しては、19世紀半ばに肢体不自由ホーム・実業学校で組織的な教育が開始されたことがプリッチャードによって明らかにされている。本稿は、この肢体不自由ホームの前身が最貧困層を対象にしたラグド・スクールであったことを確認するとともに、その実践の特徴を史料から明らかにしたものである。

19世紀後半には、慈善組織協会によって肢体不自由者への教育の必要性が社会的に喚起されるようになるが、それ以前にすでにラグド・スクール協会が肢体不自由者への適切な処遇の必要性を認識していたことが史料によって裏付けられた。すなわち、最貧困層の劣悪な生活実態を背景に、19世紀の半ばには多くのラグド・スクールに肢体不自由者がおり、彼らが社会的に排除されないようにとの問題意識のもとで教育が行われていたのであった。そして、骨関節結核への感染防止のための換気に配慮した建築構造や医師の協力による栄養状態の改善への取り組みによる肢体不自由者特有の課題への対応と、実業学校の重要な役割であった貧民収容部門の入所者による19世紀後半に急速に需要が増した家政婦の訓練も兼ねた肢体不自由者への日常生活支援の提供という二つの側面を同時に備えることができていた点が、本稿で取り上げた肢体不自由ホーム・実業学校の特徴的な点であった。こうした実践の意義がラグド・スクール協会によって強調されたのであった。

キーワード
ラグド・スクール　Ragged Schools
肢体不自由教育　Education for 'Crippled Children'
19世紀イギリス　19th Britain

Ⅰ．問題の所在

肢体不自由教育の成立や展開の要因については、これまで国内外を問わず整形外科学との密接な関連性のもとで論じられたものが多かった[1)]。すなわち、整形外科治療の補助手段としての肢体不自由教育の位置づけであるが、医療と両立した考え方が定着するのは20世紀に入ってからのことである。

たとえば、イギリスでは19世紀半ばにリットル（Little.W.J）が脳性麻痺に関する症例報告を行ったことが知られているが、そこに教育との関連性は全くなかった。

イギリスにおける肢体不自由者（Crippled）[2)] を特に対象とした（組織的な）教育の開始は、1850年頃にロンドンの「肢体不自由ホーム・実業学校」での実践あったとされている（Pritchard,1963）[3)] が、ここに当時の肢体不自由教育の特徴が指摘されている。すなわち、肢体不自由教育が実業教育との関連においてその位置づけを持っていたということである。

プリッチャードの研究では触れられていなかったが、「肢体不自由ホーム・実業学校」という名称自体が、一つの意味を持っている。

ここで使われている当時の「ホーム」という語は、短期的または恒常的に住居のない人を対象にした施設であり、子どもに生活の場と教育を受ける機会を同時に与えた場に対してラグド・スクール連盟が用いた呼称である[4)]。つまり、同校は最貧困層を対象にしたラグド・スクール（Ragged School）であったことがこの名称からわかるのである[5)]。

この肢体不自由ホーム・実業学校の実践の特徴は、これまで十分に明らかにされてこなかったが、この特徴を知ることは、後に慈善組織協会（Charity Organisation Society: COS）が肢体不自由教育の意義を社会に問いかける[6)] に至る背景を解明する一助となると考えられる。

そこで、本稿では、この肢体不自由ホーム・実業学校について、その特徴を明らかにすることを目的とした。

作業課題としては、ラグド・スクールの特徴をふまえつつ、ラグド・スクールにおける肢体不自由者の処遇、さらに、それに対する「ラグド・スクール協会（Ragged School Union）」の認識を明確にすることである。分析対象とした主要史料は、ラグド・スクール協会の機関誌及び年報である。

Ⅱ．貧困児童対策としてのラグド・スクールの発生と分化

ラグド・スクールは、日本では「貧民学校」「ぼろ服学校」「ラグド学校」などと訳されてきたもので、19世紀前半のイギリスに登場した。この名称からもわかるように最貧困層を対象にした教育機関であった。ラグド・スクールの成立に最大の貢献をしたのはシャフツベリー卿（Lord Shaftesbury, Cooper, A. A.）であった。彼は、労働者階級や貧困階級の生活や労働の改善に尽力した人物として知られ、19世紀中葉には議会でも積極的な活動を展開し、児童問題の根本的解決策としてのラグド・スクールにおける教育の充実に努めた[7]。

シャフツベリー卿の教育観は、次のように評価されている。

「かれの教育への期待と発想のもとは、まず生存と生活のレベルにあったが、成長世代における勤勉、自己抑制、有用な労働、自立の義務感など、すぐれて宗教的な信条、心情に訴えかける自律＝自助であった…（中略）…単なる知識教育に警告し、道徳的宗教的教育機会の提供による社会進歩を構想していたのである。怠惰は無知より10倍悪いと、知識に態度を優先させていた。そしてかれの考えを敷衍すれば、人生全体を通しての正しい教育によって、青少年が学習と実践に導かれ、全人格的に発達していくことを望んだ」[8] と。

これは最貧困層の人々が展望の見えない生活の中で、生活意欲の低下とより一層の貧困状況の悪循環が際限なく繰り返される状況を強く意識した考え方であった。

ラグド・スクールは1838年に最初のものが登場し、1840年代以降に本格的に拡大したとされている。その形態は多様で、「無料の昼間学校、幼児の昼間学校、青少年の夕方学校、宿泊施設、仕事・職業教育のための授産場、病人や障

害者のホーム・収容施設、雑誌や刊行図書室、礼拝所、成人学級、母親学級、銀行、集会所」（山根, 1989）[8] など貧困層の生活実態に密着した機関だったことがわかる。しかし、その活動はやはり「教育」を中心にすえていた。カリキュラムは、読み、書き、計算の基礎教育に加え、実業教育と、なによりも宗教教育が重視されたことが特徴であった。これは初期のラグド・スクールの拡大にロンドン市のキリスト教伝道会が中心的な役割を担っていたこともその理由であった。

さて、ラグド・スクールに期待された役割は、それまで教育の必要性がほとんど認められてこなかった最貧困層を対象に、①犯罪防止のための矯正施設としての役割、②実業教育を行って将来何らかの職業に結びつける役割、そして③養育能力のない貧困家庭の子どもの収容、という3点であった。

ラグド・スクールに対する評価は、「非行や虞犯傾向、さらに刑務所送りの児童がしだいに減少したようである」[9] とか、「1871年までに30万人の少年少女が犯罪から救済され、犯罪が75％減少した」[10] という指摘のように社会統制の側面からなされることが多いが、最貧困層のすさんだ生活の中でよるすべのなかった人々に宗教教育による精神的な救済と実業教育によって果たした、その生活実態に即した教育機関としての役割こそが評価されるべきであろう[11]。

こうしたラグド・スクールは、1844年にラグド・スクール協会（Ragged School Union）が結成された後、急速に設置が促進されるようになる。

そして1850年代後半には、矯正教育に関して、ラグド・スクールを母体として「矯正学校（Reformatory School）」あるいは「実業学校（Industrial School）」へと展開していった学校も現れるようになった。すなわち、ラグド・スクールの社会統制機関としての側面は、独立した学校へと分化していったのである。こうした分化の後、1870年代に義務教育制度が成立しても、なおラグド・スクールは最貧困層を対象にした教育機関として20世紀の初頭まで続いたことが知られている。ラグド・スクールは、貧困地域にあって教育の恩恵が十分に届かない子どもたちの教育機会としてその役割を担い続けたのであった。

Ⅲ．ラグド・スクール協会の肢体不自由者処遇に対する認識の特質

1. ラグド・スクールとしてのメリルボーン・ロード女子肢体不自由ホーム・実業学校

ここでは、まず最初にプリッチャードによって取り上げられた、「メリルボーン・ロード女子肢体不自由ホーム・実業学校」がラグド・スクールであったことを確認しておかなければならない。この点に関しては、その名称からラグド・スクールであろうことがすでに示唆されていたが[12]、この学校はラグド・スクール協会の機関誌に加盟校として登場していた「ヒル・ストリート肢体不自由ホーム」がその前身であることが判明した。

この根拠は、ラグド・スクール協会の機関誌ではヒル・ストリート肢体不自由ホームとして登場しているが、後の視学官報告（1863）[13] でこれがメリルボーン・ロードに移転したことが明記されており、両者が同じ学校であったことが確認できたことである。

同校は1851年に開設され、1863年にかけてメリルボーン・ロードに移転した。すなわち、同校がラグド・スクールであったことは確実である。なお、同校は1857年の実業学校法によって、実業学校としての認可も受けているが、同校がラグド・スクールであったことは非常に重要な意味を持っている。それはラグド・スクールの性格に密接な関係がある。

2. ラグド・スクールにおける肢体不自由教育開始の文脈

プリッチャードは、実業学校での肢体不自由教育の取り組みが、19世紀後半の社会的関心の喚起に重要な役割を果たしたことを述べている。これは、論述の内容の類似性から、おそらく1888年にケンジントンの肢体不自由ホームの施設長であったナイプ（Knipe）が慈善組織協会の機関誌によせた論考[14] をもとに、そのように推測したのであろうと考えられる。

それでは、なぜ、この種の学校における肢体不自由教育が位置づけられたの

であろうか。

実は、ラグド・スクールにおいて肢体不自由教育に取り組まれたのには、必然的ともいえる文脈が存在していた。

これは、ラグド・スクールに何らかの「障害」をもった子どもが少なからず存在していたことを示す記述に端的に表れている。ラグド・スクール協会の機関誌には「ロンドンのラグド・スクールを訪ねた人は、身体的・精神的に衰弱した（infirm）子どもが大勢いることに気づくであろう」[15] との記述がみられるが、これはヒル・ストリート肢体不自由ホームに関していっているのではない。各地のラグド・スクールで見られる光景だったのである。そして、それが程度の差はあるものの、何らかの肢体不自由であったことが述べられている。すなわち、それらについて、「幼児期の落下による重度の脊髄疾患、カリエス、長期のリュウマチ熱による肢体不自由、瘰癧（るいれき）による衰弱」による肢体不自由であるという明確な理由が残されている[16]。

このような肢体不自由者が多数ラグド・スクールに在籍していたのは、偶然ではない。

なぜならば、こうした肢体不自由は、最貧困層の劣悪な生活環境に直接的な関係があったからである。端的には、最貧困層の栄養不良が最大の原因とされているが、「路地や通路にはゴミや糞便が散乱しており、（中略）人が死んでも棺に入れられることもなく、腐敗した遺体がそのまま幾日も放置されているというありさま」[17] と指摘されるような最悪の衛生状態の中で暮らしが営まれていたのであった。さらに換気がほとんどなされず、屋内が一日中湿ったままのような住宅環境のひどさは衛生状態の劣悪さを日常的にし、結核[18] をはじめとした様々な伝染性の疾患が蔓延していたことによっているのである[19]。ラグド・スクール協会は、「低い社会階層の子どもたちには、明らかに上の社会階層の子どもたちよりも肢体不自由の割合が高い」[20] と指摘し、何らかの肢体不自由が貧困層によくみられることを熟知していたのであった。さらに、最貧困層の養育環境の欠如状態の深刻さは、ラグド・スクール協会にこうした子どもを保護する必要性を強く意識させるには十分なものであった[21]。

つまり、最貧困層の栄養不良の問題や、その他の劣悪な生活環境のために子どもたちが身体的にも精神的にも絶え間ない逆境におかれていること、そして、こうした環境が肢体不自由の発生に密接に関連していることをラグド・スクール協会は明確に認識していたと考えられるのである。

だからこそ、「最貧困層の子どもたちに蔓延する肢体不自由の多さを考えるとき、実に悲しい問題が発生するのである。すなわち、肢体不自由児たちが大人になったとき、より丈夫で継続的な労働をしなければならなくなっても、それを遂行できるようにはなりえないのではないか」と指摘し、「彼らの将来はあまりにも暗いものである」と、その深刻な状況について論じたのである[22]。

さらに、「貧しく希望のない肢体不自由児は、日々の糧をえることができないため、必然的により弱々しい体となり、ほとんどの場合は放置され、省みられることもなく、生きていくために乞食となるみじめな存在へと引き落とされてしまっている」[23] と述べ、何らの処遇がなされない場合に、悲惨な現実が生み出されていることを指摘した。その上で「いかにして社会の厄介者（pests）として排除させられないようにすることができるか」[24] と、この状況を改善するための適切な処遇が必要であることを主張したのであった。

つまり、ラグド・スクール協会は、肢体不自由に関わる問題の原因を、最貧困層の劣悪な生活実態の問題に帰着させてとらえ、その解決のための方策を求めたのであった。そして、同じ問題意識から具体的な実践を通じて解決しようとしていた「ヒル・ストリート肢体不自由ホーム」での事例を取り上げたのであった。

このようなラグド・スクール協会の認識の特質は、最貧困層の劣悪な生活実態を背景とした肢体不自由者の存在と、彼らへの適切な処遇の必要性の認識にその基礎が求められることを示している。ラグド・スクール協会は、「適切な処遇によって、いかに労働が可能となるのか、そして願わくは日々の糧もえられるようになるのかを速やかに示さなければ、こうした貧困層の肢体不自由者が、一般の労働市場でやっていくことは困難」[25] であると分析していたのである。これは言葉の裏をかえせば、適切な処遇がなされれば肢体不自由者が労働可能

となると考えていたことを示している。

Ⅳ．ヒル・ストリート肢体不自由ホームでの実践へのラグド・スクール協会の評価

ラグド・スクール協会は、肢体不自由者たちが適切な処遇によって労働が可能となるという考えをどのようにして得たのであろうか。

その答えは、機関誌や年報における肢体不自由者への教育を実践していたヒル・ストリート肢体不自由ホームに関する記述に見いだすことができる。

1．ヒル・ストリート肢体不自由ホームでの実践の概要

ヒル・ストリート肢体不自由ホームの運営委員会が考えていた活動の目的は、「できるだけ早く彼女たちが十分満足いく自分の仕事をすることができるようにし、誠実で自立した生活を維持できるに足るだけの十分な収入が得られる職場に送り出すこと」[26] であった。

そのための具体的な活動の中では、「読み、書き、計算、それになによりも聖書の指導がおこなわれた」[27] というように、他のラグド・スクールと同様の活動に加えて実業教育に力が入れられた。

主な実業教育の内容は、麦わらを使用したボンネットと麦わら帽子の製作が中心であった。入所者の増加に伴って、これに加えて小物や装飾品の製作、さらに婦人服の縫製も行われるようになっていった[28]。こうした実業教育は、より長期的な指導の方が利点が大きいと考えられ、1850年代の半ばまでは、入退所者を最小限にとどめ、継続的で丁寧な指導が行えるように配慮がなされていたのであった[29]。

この作業の様子が描かれたものをFig.1として示す。この図は当時のラグド・スクールでの肢体不自由者を描いた貴重な資料であり、後述するように衛生的で換気が十分にできるような建築になっていることなどもわかる。

ラグド・スクール協会の訪問者は、「肢体不自由者が製作した製品は、十分に

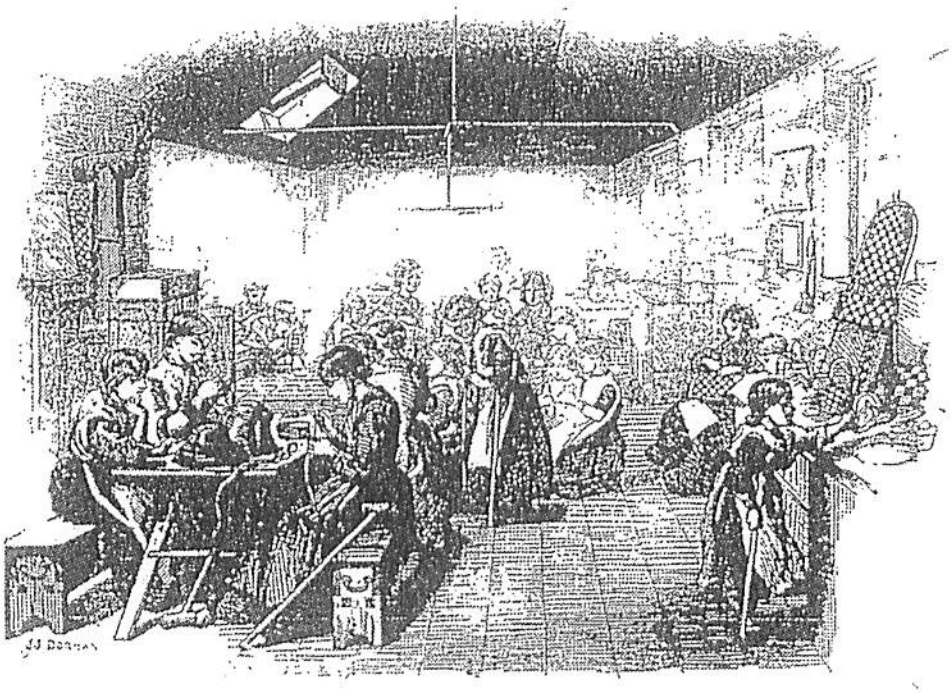

Fig. 1　ヒル・ストリート肢体不自由ホーム

満足のいく出来映えであった」[30] と、その作業の様子を高く評価していた。

ヒル・ストリート肢体不自由ホームでは、肢体不自由者に様々な配慮を行っていた。

たとえば、建物への工夫である。すでに述べたように、最貧困層では劣悪な住宅環境の中で伝染病の流行が深刻であったが、同校では学校の衛生環境の整備を図った。

「穴をあけた亜鉛板をすべての部屋の窓やドアの一番上に配置した。これによってそれぞれの階層の空気は常に新鮮となり、汚れた空気は建物の一番上にあけられた大きな換気口を通って排出された（中略）たとえ、50人もの女子が眠っているような大きな寮でさえも効果は絶大である」[31] と評されている。これは後にロンドンのある病院にも採用されるようになるほど評価の高いシステムであった[32]。

また、肢体不自由の大きな原因とされた栄養不良の問題にも配慮がなされた。

「肢体不自由児たちは体質的に非常に弱かったので、最大限の栄養補給ができる食事を用意しなければならず、これにはさらに費用が必要であった。彼らの

献立表は、内科医のDr. Routhによって慎重に作成された」[32] との記述がそれを示している。

さらに、外科医の支援も得て、「入所しているほぼ全員の肢体不自由児に大きな改善がすみやかにみられた。杖をまったく使わなくてすむようになったとか、腕や足が柔軟になり動かせるようになった、さらに、それまでは青白い頬をしていたのに健康が良くなったように朱色になっていったという証言があたりまえになった」[32] という記述もみられる。

このように内科医・外科医の協力を得ながら、肢体不自由者たちの健康に気が配られていたことが理解できる。これは、後の肢体不自由教育における医療との密接な関連の必要性の認識につながる萌芽的な取り組みとしても注目できる。

この他、移動用の手押し車（perambulator）が用意されていたという記述もある[32]。

2. 貧民収容部門入所者の協力

同校には別の面で大きな特徴があった。

それは貧民収容部門（Refuge）への入所者が肢体不自由者の身の回りの世話をしていたことであった。「肢体不自由児たちは、非常に無力であったので、多くの給仕を必要とした。このため大勢の貧民収容の女子たちが入所していた。この者たちは肢体不自由児たちに必要な手助けを行っていた」[32] ことが記録されている。

もちろん、貧民収容のものたちは、肢体不自由者の支援のためだけに入所していたのではない。「彼女たち自身は家政婦（domestic servant）としての訓練を受けていた」[32] のである。すなわち、彼女たちは、肢体不自由者の入所生活の支援をすることによって、炊事や洗濯などの技術を身につけたが、それは家政婦の仕事につく準備ともなっていたのである。

なお、貧民収容の者たちに対する実業教育が行われたのには、1850年代から70年代にかけて「女性使用人（＝家政婦）」の数が急増したことが背景にあ

る[33]。

この方式は両者にとってメリットがあったが、とりわけ肢体不自由者にとっては、炊事等から解放されたことで、実業の学習により時間を費やすことができた点は大きかったのであった。

3. ヒル・ストリート肢体不自由ホームの成果とこれに対するラグド・スクール協会の評価

このような実践に対して、ラグド・スクール協会は「貧困な肢体不自由者たちは、悪徳やみじめさから立ち直ることができたばかりでなく、自分自身の生活費の一部を賄うことができるようになったのである。つまり、いかに貧しいものたちがその不足を補うために必要な費用を自分で賄えるような支援をすることができるのか、という大きな問題の解決に貢献した」[34] と述べて、それを高く評価した。この認識が決定的となるのは、「様々な注文をこなしてボンネットや麦わら帽子などを製作し、毎週5～7シリングの収益をあげられるようになった。そのうち4シリングを入所費として支払い、残りの数シリングを将来に備えて貯めておいた」[35] という事実によってであった。

これが「貧困な肢体不自由児たちがいかにすれば自分の力で生活の糧を得られるように指導できるのかの見通しを立てる」[36] という意図のもとに行われたことをふまえ、適切な環境を整えることで肢体不自由者が「社会の厄介者として排除されないように」[37] することが可能であることをラグド・スクール協会は確信したのであった。

実際、同校での実践に対しては、「全国から送られてきた手紙の数の多さは、この肢体不自由ホームが国内のあらゆる人から関心を持たれ、かつこの施設の重要な部門であり、さらにその福祉（welfare）の関心が高まってきていることを証明している」[38] という記述からも明らかなように、反響は各地から寄せられてきたのであった[39]。

ラグド・スクール協会は、こうした実践を高く評価し、「連合王国（United Kingdom）にある施設で、肢体不自由児のための唯一の施設であるこのホーム

は、あらゆる進歩主義者の大いなる関心を呼び起こすに違いない」[40] と述べて、その意義を強調したのであった。

ラグド・スクール協会は最貧困層における肢体不自由者の発生の原因をふまえた上で、彼らに対する処遇の必要性を自覚するとともにヒル・ストリート肢体不自由ホームの実践の経験から、適切な教育による成果を確信したのであった。

同校は後に実業学校としての認可を受けて「肢体不自由ホーム・実業学校」となるが、他の実業学校とは異なり「治安判事命令」による強制収容者をほとんど入所させず、肢体不自由者への実業教育機関としての役割に徹していた。これに対して視学官から再三の改善勧告がなされたが、同校はついにそれに応じることなく肢体不自由者の実業教育に力を注ぎ続けたのであった[41]。そして、その実践が1880年代の終わりになって慈善組織協会の注目に留まるところとなり、同様の数校とともにその成果が広く公にされ、肢体不自由者に対する教育への関心が強く喚起されることにつながっていったのである[42]。

V．まとめ

骨関節結核への感染防止のための換気に配慮した建築構造や医師の協力による栄養状態の改善への取り組みによる肢体不自由者特有の課題への対応と、実業学校の重要な役割であった貧民収容部門の入所者による19世紀後半に急速に需要が増した家政婦の訓練も兼ねた肢体不自由者への日常生活支援の提供という二つの側面を同時に備えることができていた点が、本稿で取り上げた肢体不自由ホーム・実業学校の特徴的な点であった。

最貧困層の劣悪な生活環境問題の解決のためのラグド・スクールと実業学校の両者の持つ諸条件を効果的に融合させた実践こそが、後に慈善組織協会が意義を強調する肢体不自由教育の原型となっていったのである。

本研究が対象とした時期には、「特別な教育的ニーズ」概念自体が存在していなかったが、肢体不自由ホーム・実業学校が取り組んだ実践の過程は、当時の

実業学校の法的位置づけとは一線を画し、肢体不自由者自身に関わる要因と生活環境に関わる要因とを関連づけた視点から展開されたことを示していた。この点は、今日の特別ニーズ教育の発想に通じる側面を持っていたともとらえることができよう。

注

1) 石川昌次：肢体不自由教育論．中央法規，1996；全国肢体不自由養護学校長会：肢体不自由教育の発展．日本肢体不自由協会，1969；村田茂：新版日本の肢体不自由教育－その歴史的発展と展望－．慶應義塾大学出版会，1997．など。

2) 今日ではphysical disabilityなどの語が使われるが、19世紀イギリスでは広義にはphysically defect（身体的欠陥）が用いられ、特に運動機能の障害を指す場合にはcrippleが用いられた。

3) Pritchard, D. G. (1963): Education and the Handicapped 1760-1960. -.Routledge.（岩本憲監訳：障害児教育の発達，黎明書房，1969, p.79.）。このプリッチャードの研究を日本に紹介する上で大きな役割を果たしたのは、石部元雄：草創期における欧米肢体不自由教育．東京教育大学教育学部運動・知能研究．16, 1969.である。

4) 真城知己：19世紀ロンドン慈善組織協会（COS）のラグド・スクールの役割への認識.関西教育学会紀要．22, 1998, p.147.

5) 真城知己：19世紀イギリスのIndustrial Schoolと肢体不自由児.関西教育学会紀要，第20号，1996a, pp.91-95.

6) Charity Organisation Society (1893): The Epileptic and Crippled Child and Adult. Swan Sonnenschein.

7) 山根祥雄：シャフツベリーとラグド学校．大阪教育大学教育学研究室「教育学論集」，18, 1989, pp.137-146.

8) ibid., p.141.

9) 菅野邦彦：イギリス国民教育制度史研究．明治図書，1978, p.63.

10) Bredy, J.W.: Lord Shaftesbury and Social Progress. Allen and Unwin, 1933, p.151.

11) 後に肢体不自由者への教育の意義を社会的に喚起した慈善組織協会も、当時の効率基礎学校が具備できなかった自立的・自律的精神の涵養の機能を理念として明確に示したラグド・スクールの意義を評価していた（COS: The School Board and Ragged Schools. Charity Organisation Reporter. vol.11. No.456,1882, pp.349-350.; 真城：op cit, 1998, pp.146-150.）。

12) 真城：op cit., 1996a, pp.94-95.

13) Office of Inspector of Reformatories and Industrial Schools: Reformatory and Industrial Schools of Great Britain, 6th Report. HMSO, 1863, pp.21, 61,79.

14) Knipe: Some Difficulties in Dealing with Cases of Cripples II. Charity Organisation Review. vol.4, No.43, 1888, pp.296-301.
15) Ragged School Union: The Cripples' Home, Hill Street. Ragged School Union Magazine. vol.7, 1855a, p.69.
16) ibid., p.70.「瘰癧」とは結核性の頸部リンパ節炎のことである。
17) Chesney, K.: The Victorian Underworld. Curtis Brown, 1970.（植松靖夫・中坪千夏子訳，ヴィクトリア朝の下層社会．高科書店，1991，p.11.）
18) 村岡健次：病気の社会史．角山榮・川北稔編．路地裏の大英帝国－イギリス都市生活史－．平凡社，1982, pp.98-104.
19) Ragged School Union: op cit., 1855a, pp.69-70.
20) ibid., p.69.
21) ibid., p.70.故意にけがをさせられて肢体不自由になった子どもの事例は後を絶たなかったし、貧しさが激しいほどより低い年齢で労働に出され事故に遭う子どもが多かった。
22) ibid., p.70.
23) Ragged School Union: The Cripples' Home. Ragged School Union Magazine. vol.13. 1861a, pp.263-268.
24) Ragged School Union: op cit., 1855a, p.70.
25) ibid., p.71.
26) Ragged School Union: op cit., 1861a, pp.266-268.
27) ibid., p.266.
28) Office of Inspector of Reformatories and Industrial Schools: Reformatory and Industrial Schools of Great Britain, 19th Report. HMSO, 1876, pp.45, 144-145, 235, 244, 254, 264, 280, 293.
29) Ragged School Union: Hill Street, Dorset Square, Brief Notices of Some of the Schools in London and Its Suburbs. The Eleventh Annual Report of the Ragged School Union, 1855b, p.34.
30) ibid., p.34.
31) Ragged School Union: op cit., 1861a, p.266.
32) ibid., p.266.
33) Horn, P.: Rise and Fall of the Victorian Servant, 2004, Punch.（子安雅博訳．ヴィクトリアン・サーヴァント．英宝社，2005）
34) Ragged School Union:op cit., 1855a, p.71
35) Ragged School Union: Hill Street, Dorset Square, Brief Notices of Some of the Schools in London and Its Suburbs. The Seventeenth Annual Report of the Ragged School Union, 1861b, pp.38-39.

36) ibid., pp.38-39.

37) Ragged School Union: op cit., 1855a, p.70.

38) Ragged School Union: Hill Street, Dorset Square, Brief Notices of Some of the Schools in London and Its Suburbs. The Twelfth Annual Report of the Ragged School Union, 1856, p.37.

39) ラグド・スクール協会が同校を高く評価したもう一つの理由は、同校での生活を通じて、周囲から信頼や尊敬を選るほどに行動面や礼儀に大きな改善が図られるなど、肢体不自由者や貧民収容の者たちが生きる希望を見いだしていく精神面への働きかけにあった。

40) Ragged School Union: op cit., 1861a, p.268.

41) 真城 : op cit., 1996a, pp.91-95.

42) 真城知己 : イギリスにおける慈善組織協会の障害児教育への貢献に関する研究－肢体不自由教育への意義を中心に－.特殊教育学研究, 34(2), 1996b, pp.21-32.